

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520085

研究課題名(和文) 変革期における大坂漢学の研究 懐徳堂を中心に

研究課題名(英文) Study for Chinese classical literature, in a transformation period in Osaka.

研究代表者

矢羽野 隆男 (Yahano, Takao)

四天王寺大学・人文社会学部・教授

研究者番号：80248046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：幕末維新期の懐徳堂教授・並河寒泉について、これまで活用されなかった資料を用いて、主に次のことを明らかにした。寒泉が「文久の修陵」という歴史的かつ政治的に重要な意義をもつ事業に関与したこと。幕府と密接な関係を保ちながら、一方で水戸学に傾倒していたことにより、思想的政治的には幕府と朝廷との間で苦しい立場にあったこと。

泊園書院の藤澤東ガイ・南岳については、中国の儒学と日本の尊王思想とを融合させ、その経学が近代国民国家に理論的基礎を与えるものであったことを明らかにした。全体として、懐徳堂と泊園書院とを比較対照することで、変革期の大坂漢学を統一的に把握する新たな視点を提示できた。

研究成果の概要(英文)：I clarified the following two points, exploiting some materials which were not fully utilized to research Kansens Namikawa. Kansens actually got involved in the historically and politically significant project, known as "Bunkyo no Syuryo", repair works conducted in the Bunkyo period. Kansens was put politically and ideologically in a predicament of being caught between the Tokugawa government and the Imperial Court for his position that he had seriously devoted himself to learning "Mito-gaku".

The other clarification that I have made in the research is that both Togai Fujisawa and his son Nangaku Fujisawa at "Hakuen-shoin" private school endeavored to integrate Confucianism, a teaching in China, with Son'no Joi, a slogan of reverence for the Emperor and the expulsion of foreigners. Thus, I have concluded that the fact indicate that "Keigaku", a study of "Keisho", played an important role in establishing the theoretical foundation for the modern nation-state in Japan.

研究分野：中国哲学・日本漢学

キーワード：懐徳堂 並河寒泉 泊園書院 藤澤東ガイ(田+亥) 藤澤南岳 大坂 漢学

1. 研究開始当初の背景

(1)享保9年(1724年)に町人の手で大坂に設立され、同11年に幕府の官許を受けた懐徳堂は、朱子学を基本としつつ、批判精神に富む学風を生み、中井竹山・履軒、富永仲基、山片蟠桃ら異才を輩出、公に開かれた近代的知を準備したとして、日本近世儒学思想史において高く評価され、その担い手であった竹山・履軒、仲基・蟠桃については多くの研究が蓄積されてきた。しかし、懐徳堂研究における対象には偏りがあり、竹山・履軒ら以降は研究が激減する。懐徳堂の思想史的意義の全体的な把握には、その最盛期のみならず、廃校までの時期も視野に入れる必要があると考えた。

(2)寒泉と同時期の大坂には、懐徳堂と学派的に対立する関係にあった藤澤東暎の泊園書院があり隆盛を呈していた。藤澤東暎は徂徠学に連なる学者で、幕末期には大坂一の泰斗と称せられた。泊園書院に関する研究は、同書院を淵源として顕彰する関西大学関係者によって成果をあげてきたが、懐徳堂を含めた近世の大坂漢学の思想状況において全体的に捉えるということは十分行われていなかった。

2. 研究の目的

(1)従来、幕末に懐徳堂が廃校に至った原因として、学校財政の窮乏および幕府から受けた特権の剥奪という社会的・経済的側面からの説明のほか、朱子学一辺倒とされた並河寒泉の思想的特徴から説明がなされてきた。しかし、朱子学派としての懐徳堂の

思想的立場は五井蘭洲以来の伝統で、寒泉に限ったものではない。よって、並河寒泉を対象に、その学問・思想の特色を解明することを主たる目的とした。

(2)泊園書院の藤澤東暎は、五井蘭洲『非物篇』や中井竹山『非徴』といった懐徳堂学朱子学からの徂徠批判に対し、再批判の書『辨非物』を著し、徂徠学の立場から反論を行った。『辨非物』には泊園書院と懐徳堂との間にある学問観の相違が鮮明である。しかしその一方で、徂徠学から離れた、懐徳堂朱子学との接点も見出せる。泊園書院の藤澤東暎を比較対象として考え併せることで、幕末維新期の大坂漢学の思想状況を総体として把握することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)並河寒泉の学問・思想に関する研究は、寒泉にまとまった著述が少なく、これまで限られた資料をもとに解明されたことは、無鬼論や攘夷論など限定的であった。本研究は、別の角度から寒泉の学問・思想の特色を捉えるべく、従来十分に用いられなかった日記『居諸録』や詩文稿『寒泉遺稿』、「陵墓調査報告書」など膨大な資料を活用する点に特色があった。

ただ、その資料的性質から記述が断片的な『居諸録』や『寒泉遺稿』については、そこに寒泉の学問・思想の体系を見出すのは難しく、よって「誰に、何が、どのように語られたか」という視点から、門人情報や社会政治事件に対する所感などを整理し、寒泉の社会・政治思想を抽出考察することとした。

また従来まったく利用されていなかった

「陵墓調査報告書」を取り上げ、江戸期天皇陵の研究に視界に入っていなかった寒泉の陵墓調査活動を研究史上に位置づけ、かつ寒泉の活動に窺える歴史的・思想的意義を考察することとした。

(2) 懐徳堂朱子学からの徂徠学批判に対して藤澤東暎が著した反駁の書『辨非物』は、両校の対立点とともに共通点を知る重要な資料である。ただ、その言説は、朱熹『論語集注』、徂徠『論語徴』、蘭洲『非物』という重層的な議論の上に成立しており、それらを踏まえた解読は複雑で精密さを必要とする。よって、重なり合う論点を整理しつつ正確に解読するために、訳注の形で成果を定着させることとした。

また泊園書院には東暎の門人記録『菁莪録』や、東暎の学問の精粹『泊園家言』などがあり、東暎においても並河寒泉と同様に、「誰に、何が、どのように語られたか」という視点からその学問・思想の輪郭を描くことを企図した。

このように、寒泉と同時期の大阪にあり学問的に対立した泊園書院の藤澤東暎を比較対象にし、懐徳堂と泊園書院とを関連付けて考察する方法により、江戸時代から昭和にいたる大阪漢学を総体として説明することを試みた。

4. 研究成果

(1) 本研究の研究成果は、既発表の論文・資料報告・訳注を取りまとめ、それにその後得た最新の成果を盛り込んで「報告書」(全 180 頁)として公表し、関係の研究者および研究機関(大阪大学附属図書館、関西大学図書館、四天王寺大学図書館、国立

国会図書館、大阪府立中之島図書館、大阪市立中央図書館)に寄贈した。

以下(1)~(6)に、主たる研究成果についてその概要を記す。

(2) 並河寒泉は幕府の委嘱を受けて安政2年から3年にかけて河内所在の陵墓実地調査を行い、調査結果を報告書にまとめて幕府へ提出した。その陵墓調査に関する考証・調査記録・報告書草稿などの資料のうち、天理大学附属図書館所蔵分 および 宮内庁書陵部所蔵分 について詳細に解読し、解題の形式で内容を整理して公表した。また、その陵墓調査関係資料を補足する形で、『居諸録』中の陵墓関係記事に着目しそれらを抽出考察した。

これらの作業により、寒泉の陵墓調査の実態が明らかになった。すなわち、委嘱された河内所在の陵墓にのみ任務の対象としての関心を向けたのではなく、大和の神武陵や日向の人皇三代の陵墓など広く陵墓全般に関心を寄せて研究したこと、後の文久の修陵で活躍した陵墓研究者である谷森善臣や平塚瓢斎らと共同調査や資料貸借などの形で連携協力していたこと、文久の修陵の際に寒泉の調査研究が相応の評価をもって踏まえられたこと、などの点である。

これらの作業を踏まえて、江戸期の修陵事業の流れに寒泉の陵墓調査を位置付けるとともに、寒泉における思想的政治的な意味 幕府の命に応じて尊王を实践する公武一和に寄与する意義ある行為であったことを明らかにした。

(3) 並河寒泉は崇祖の觀念が強く、非常な責任と熱意とをもって懐徳堂の伝統の継承に

努めた。寒泉の日記『居諸録』には、堂所蔵の書籍・器物を戦火から守るために細心の注意を払い、また流出した書籍・器物を無理をしてでも買い戻すなど、その努力の跡が見て取れた。また『寒泉遺稿』には、書籍・器物の流出を嘆く詩文も見出せた。

財政が窮乏した幕末維新の変革期に学校運営に苦慮した寒泉が、身を挺して守り伝えた堂蔵の遺書・遺物の具体的な姿を示すのが、天理大学図書館所蔵の『並河潤菊家傳遺物目録』である。これは寒泉が娘の閨菊に託した遺書遺物の目録で、激動の時代を潜り抜けた後の懐徳堂の状況を窺う資料として価値が有り、よってその記述を翻刻した。併せて、解題を付し、幕末維新时期に懐徳堂の遺書遺物の散逸を防いだ並河寒泉の歴史的な役割、懐徳堂関係の遺書遺物が現在の大阪大学附属図書館懐徳堂文庫の所蔵に帰するまでの経緯を明らかにした。

(4)懐徳堂は学問教育の拠点であると同時に、情報集散の拠点でもあった。寒泉の日記『居諸録』からは懐徳堂をめぐる情報環境をうかがうことができる。

堂は行政管理上、町役の管轄を受けなかったため、幕府の触書は町役を経ずに直接に懐徳堂へ通知され、いち早く正確に公式情報を入手できる環境にあった。また、中井竹山以来、公務や講義で公私にわたり交流の深まった町奉行所役人は重要な情報源であり、また大坂在住の知識人、諸藩の蔵屋敷に勤務する門人などからも諸種の情報が寄せられた。さらに寒泉の場合、京都在住の並河本家からもたらされる朝廷筋の情報も貴重であった。

懐徳堂に寄せられた様々な情報のうち、

寒泉が特に関心を寄せてしばしば日記『居諸録』に取り上げた島津久光に関する記事に注目し、それらの情報がどのように伝えられたか幕末懐徳堂の情報環境を考察した。併せて『寒泉遺稿』の記述も補足的に利用して、幕末の政局に対する寒泉の政治意識を明らかにした。

(5)幕末の大坂で栄えた泊園書院の藤沢東咳は、徂徠『論語徴』を批判した懐徳堂の五井蘭洲『非物篇』に対し、徂徠学の立場から再批判を加えて『辨非物』を著わした。

『辨非物』を読解するためには、朱子徂徠—蘭洲—東咳と層をなして重ねられた注釈を読み解く必要から、各注釈の議論を整理した上で東咳の主張を把握しなければならず、そのような作業に適した訳注の形で読解内容を定着させた。

この『辨非物』には、朱子学の懐徳堂と徂徠学の泊園書院との学問的相違が鮮明に見て取れるとともに、一方で幕末維新时期という時代を共有した両校の接点も見出すことができる。「尊王」がその接点であるが、「尊王」をどのように追求するかにおいて、やはり両校の思想的特質が浮かび上がる。懐徳堂は、民・士 諸侯 幕府 朝廷という階層を尊重し、幕府を通して行う尊王、いわば水戸学的尊王であった。これに対し泊園書院は、民・士 諸侯 朝廷として幕府の介在を要しない、いわば一君万民的尊王であった。

懐徳堂は江戸幕府の崩壊とともに幕を閉じたが、泊園書院は幕末明治の変革期を乗り切り、明治・大正・昭和と繁栄した。両校のたどったこの対照的な道筋は、直接には社会経済的な要因があるにせよ、尊王を

めぐる思想的立場の違いも関係することを指摘した。

(6) 泊園書院の『大学』解釈について、徂徠学・朱子学との異同および泊園学の特徴を明らかにし、併せてそれが近代国民国家における国民観に経学的な基礎を与えたものであることを明らかにした。

すなわち、泊園書院の『大学』解釈に見える民衆観は、徂徠のそれと大きく異なる。徂徠における民衆は君主の教化の対象であって自己革新を期待されない。対して泊園説の民衆は、君主の教化を奉じつつ、それぞれの立場で自己修養を行い、その徳を社会へ発揮することを期待される存在である。このような泊園『大学』説から導き出された民衆観は、「教育勅語」の示す近代国民国家における国民像に重なるものである。

幕末に没した東咳にとって「教育勅語」は知る由もなかったが、東咳には一君万民的な国家観および国民像が見出せた。泊園書院の『大学』解釈は、「教育勅語」に示される近代国民国家における国民像に対して、経学的な基礎を与える役割を果たしたものであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

矢羽野隆男、泊園書院の『大学』解釈 徂徠学の継承と展開と、『中国研究集刊』、査読有り、第59号、2014年12月、1~34頁

矢羽野隆男・池田光子、『並河潤菊家傳遺物目録』翻刻および解説、『懐徳堂研究』、査読有り、第5号、2014年2月、103~131

頁

矢羽野隆男、並河寒泉の陵墓調査 幕末懐徳堂教授の活動、『懐徳』、査読有り、第82号、2014年1月、1~20頁

矢羽野隆男、泊園書院の『論語』学 懐徳堂との関わりから (講演口述筆記)、『泊園』、査読あり、2013年7月、第52号、47~87頁

矢羽野隆男、宮内庁書陵部所蔵 並河寒泉「陵墓調査関係資料」解題、『懐徳堂研究』、査読有り、第2号、2013年2月、61~83頁

矢羽野隆男、天理大学附属天理図書館所蔵 並河寒泉「陵墓調査関係資料」解題、『中国研究集刊』、査読有り、第51号、2012年10月、75~104頁

矢羽野隆男、藤澤東咳著『辨非物』訳注 (一) 「序」部分、『懐徳堂研究』、査読有り、2012年2月、第3号、147~189頁

〔学会発表〕(計6件：学会1件、招待講演会2件、研究会3件)

矢羽野隆男、幕末懐徳堂の陵墓調査 最後の教授・並河寒泉の活動、第64回日本中国学会、2012年10月7日、大阪市立大学(大阪府大阪市)

矢羽野隆男、泊園書院の『論語』学 懐徳堂との関わりから、第52回泊園記念会「泊園書院とその周辺2」 関西大学東西学術研究所主催、2012年10月26日、関西大学(大阪府吹田市)

矢羽野隆男、江戸期の修陵事業における
懐徳堂、第7回 日本歴史文化講座 中国浙
江工商大学東亜文化研究所・中国社会科学
院日本研究所共催、四天王寺大学協賛、
2013年8月23日、四天王寺大学（大阪府
羽曳野市）

矢羽野隆男・池田光子、『並河潤菊家傳遺
物目録』について、第14回 懐徳堂研究会
例会、2013年12月15日、大阪大学（大阪
府豊中市）

矢羽野隆男、泊園書院の『大学』解釈
祖徠学の継承と展開、第15回 懐徳堂研
究会例会、2014年3月26日、大阪大学（大
阪府豊中市）

矢羽野隆男、並河寒泉『居諸録』に見え
る風聞 島津久光への期待、第16回 懐
徳堂研究会例会、2014年8月25日、大阪
大学（大阪府豊中市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

矢羽野 隆男（YAHANO, Takao）
四天王寺大学・人文社会学部・教授
研究者番号：80248046